

2. Martzloff の分類では、棘状型1例、中間型13例、紡錘型12例、上皮内癌1例で、CPL分類では、P・L型が5例あつた。

3. 癌の子宮頸部に於ける存在部位は、前後左右の間では特別な関係はなかつた。

4. 癌の占居部位は、明かに子宮腔部のみを侵したものは4例、子宮腔部及び頸管の両域を等しく侵したものは5例、主に頸管を侵かし一部子宮腔部を侵したものと及び明らかに頸管のみを侵したものは18例であり、明らかに頸管側に占居せるものが多いと云える。

5. 癌組織と腔部本来の扁平上皮との関係は、明らかに関連があつたものは19例であり、癌組織が明らかに頸管腺内に認められたものは21例であつた。

#### 43. (演) 子宮頸癌の発生部位に関する研究 — 扁平・円柱上皮境界の新しい定義の提唱 —

(東大) 小林 隆, 竹内正七, 松枝和夫  
豊島 克, 泉 陸一, 青木幹雄

従来、子宮頸癌の発生部位を論ずる場合にその基準として所謂 S.C.J. (Squamo-columnar junction) を設定して検討されて居るが、S.C.J. の定義は未だ曖昧で決定されて居ない。

我々は子宮腔部ピランの発生、消失に子宮頸管の外翻、内翻がその主因をなすとの立場から、深部頸管腺の最外縁を“一次 S.C.J.”として所謂 S.C.J. を明確化した。

この意味での S.C.J. の子宮頸部に於ける配列を摘出非癌子宮例について連続段階切片法に依り検討し、現在まで、これが同心円的に連続線上に凡そ配列する事を認めている。

次に初期子宮頸癌並びに上皮内癌の占居部位を決定する際、深部頸管腺が病変の浸潤のため認められない場合、その占居部位が円柱上皮領域か、扁平上皮領域かのいずれに属するかの決定が困難な場合が少なくないが、上記の所見に従つて、健存頸管腺との関係を重視し更に Mucicarmin 染色, PAS 染色, 鍍銀染色 (Papp 法) などの併施により占居部位を検討した。

初期頸癌25例、上皮内癌10例についての成績は、少くとも頸管腺と無関係に、扁平上皮より発生したと思われる症例は1例もなかつた。従つて、扁平上皮より発生する頸癌は腔癌と同義であり、極めて稀であることが示唆された。

現在なお症例を増して検討中である。

#### 44. (演) 子宮頸扁平円柱連合部上皮と前癌状態並に上皮内癌及び侵入癌との組織化学的比較研究(第1報)

(中野組合) 佐伯政雄, 大塚英郎, 大橋俊彦  
(済生会中央病理) 望月 昇

所謂上皮内癌と称されるものの中には、非可逆的に侵入癌に発展するものと、可逆的に正常上皮に還元するものとの2型が考えられ、その鑑別は形態組織学的には困難で、follow up による以外判別方法がないと見做されている。正常細胞が突然変異によつて癌細胞に変化するとすれば、上皮内癌中の癌細胞と非癌細胞とは、たとえ形態組織学上同一の形態を呈するとしても機能的(化学的)には何等かの相違があつて然るべきである。

また子宮頸癌が子宮頸扁平円柱連合部(基底細胞或は reserve cell) から発生することは一般に認められている。

以上の論拠に基き妊婦、非妊婦及び女性胎児等の健全な扁平円柱連合部の上皮と、妊婦並びに非妊婦に於ける前癌性変化或は上皮内癌及び侵入癌等に就いて組織化学的に検討を試みるとともに、鍍銀法によつて基底膜の状態をも併せ研究したのでその所見を報告する。

#### 45. (演) 子宮体癌の増殖型に関連する2,3の因子について

(都立広尾病院) 藤平治夫, 岡田 清

子宮体癌の各種増殖型を規正している因子については尚明かでない点が多い、我々は子宮体癌68例につき2,3の観察を試みた。

増殖型を4型に分ち各種染色を行い、主として腫瘍に接する間葉系線維成分につき検索した。〔1〕外向性増殖型：最も多い型であり、特に瀰漫性のものが多い、Ca, epitheliale の型を示し、間質反応としては低反応型を示し基底膜様構造を認めることが比較的多い。乳嘴状乃至濾胞性腺癌が多い。〔2〕内向性増殖型：閉経後にこの型を示すものが多い。Ca, epitheliale と Ca, fibroepitheliale の中間型を示すものが多く特に簇出型に間質量が多い、間質反応としては線維の融解粗化を示す型が多く、組織像としては Anaplasie の度の強いものが多い、基底膜構造の不明のものが多い。特に簇出型では Invasionsfront に間質の滲出性反応をみることが多い。約半数に卵巣転移を認める。〔3〕混合型：(1)に次いで多い型で、特に肥大型が多い。〔4〕表面性増殖型：閉経前婦人に多い型で、間質量としては多くは中間型乃